

「英語教育改善プラン」に基づいた教員の英語力・指導力向上に向けた取組 「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～山形県～

本県の課題 「CAN-DO(目標) → 指導 → 評価」の一体化の確立 → それぞれを個々のものとして捉えた指導にとどまっている

【課題解決のための具体的な方策】

- (1) 研修 ①中高教員相互派遣研修 ②中高合同CAN-DOリスト研修会 ③ 英語ディベート指導者研修会 (高校)
(2) 研修協力校の取組 (公開授業・研究協議会)

取組内容 (1) 研修

- ① 中高教員相互派遣研修: 県内4地区において春、秋の2回実施。春は高等学校を会場に、秋は中学校を会場に、公開授業と研究協議会を実施。お互いの指導法について情報提供を行い、理解を深めた。
- ② 中高合同CAN-DOリスト研修会: 県内2会場で実施。平成30年度は、「CAN-DOリストの内容を普段の授業や定期考査にどのように落とし込むか」をテーマに実施。グループ毎(校種別)にパフォーマンステストを作成したのち、その内容についてプレゼンと質疑応答を実施した。
- ③ 英語ディベート指導者研修会(高校): 新学習指導要領を見据え、英語ディベートの授業への効果的な活用法やジャッジの方法に関する講義と演習を実施した。

成果と課題

- 中高教員相互派遣研修参加者数(H30) 約170名
参加教員のアンケートから
 - ・中学校の教員として、高校入試を1つのゴールとしつつも、その先を見据えた指導をしていきたいと考えた。
 - ・英語を使う喜びを生徒が感じられる授業デザインや指導力が高校の教員にも必要だと感じた。
- 中高合同 CAN-DOリスト研修会参加者数(H28~30) 約170名
参加教員のアンケートから
 - ・これまではどのような形で評価まで持っていったらよいか難しかったので、道が見えてきた気がする。
 - ・演習の中で他の先生方から様々な視点でアドバイスをいただけて、自分の学びが広がった。
- 山形県高校生英語ディベート大会参加者数の推移(H28、29、30)
74名 → 98名 → 131名
- 研修実施後に行うアンケートの結果を見ると、「評価」に特化した研修会を望む声が多い。CAN-DOリストに基づいた授業計画、パフォーマンステストの作成等は進んでいるが、評価については悩みながら行っている学校が少なくない。
- 研修会への参加者に偏りがあり、学んだ研修成果を所属校の英語科教員全体で共有するには至っていない。

取組内容 (2) 研修協力校の取組

- 平成30年度研修協力校「県立米沢東高等学校」の取組から
- ① CAN-DOリストをもとに「パフォーマンステスト」を作成し、学年の枠を外して、英語科教員全員で評価に加わった。その結果、「評価基準」を教員間で共有でき、教材研究においてもパフォーマンステストとのつながりを意識するようになった。
 - ② 公開授業後に実施した研究協議会では、研修協力校からの「パフォーマンステスト」についての事例発表、その後各校の実施状況についてグループ討議を行った。各校における実施方法や評価の工夫について、全体で共有した。

成果の波及・周知について

- 小・中・高の研修協力校における公開授業・研究協議会において、「CAN-DO(目標) → 指導 → 評価」を一体化させた事例を提供してもらい、参加者全員で共有した。
- 授業改善のポイント等をわかりやすく示したリーフレットを各校に配布した(小・中学校)
- 研修の中では、中・高それぞれが作成したCAN-DOリストを互いに見て質疑を行い、3年間の指導を見通すことにつながった。

課題解決のための手立て

- 「評価」に関する研修会や資料提供を充実させることで、校内研修の機会を増やし、各校でのPDCAサイクルの効果的な運用や授業改善につなげる。
- 公開授業の機会を可能な限り異校種にも開くようにし、研修機会の確保に努める。
- 教師の負担軽減のために、研修日を長期休業中に設定したり、県内複数地区での開催を検討する。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～河北町立溝延小学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- 課題 ①英語を使ったコミュニケーション活動に対して消極的な児童が多い ②コミュニケーションを図る目的が明確ではない
手立て ①十分なインプットを行った上でのアウトプット ②コミュニケーションを図る必然性のある言語活動の工夫

具体の取組の内容

①十分なインプットを行った上でのアウトプット



ALTの発音を繰り返し聞き、その後、全員が授業で取り扱う単語や表現を何度も聞いたり言ったりする。



インプットした表現に既習事項などと組み合わせて自分が伝えたい内容を考えさせ、コミュニケーション活動をする。

②コミュニケーションを図る必然性のある言語活動の工夫



英語はコミュニケーションの手段であることを意識させ、使う必然性や目的を感じさせるとともに、児童がコミュニケーションを図りたいと思えるような場面を各単元に設定するようにした。また、ゲーム活動を行う際には、勝敗が目的ではないことを確認した上で活動に取り組むようにした。

コミュニケーション活動を行う際には、活動前にALTと担任のデモンストレーションを見せ、「この単語を使ってみよう」「こんな表現ができるかもしれない」という見通しをもたせた上で活動に入った。

成果①

以前はコミュニケーション活動中に日本語でやり取りしたり、曖昧なままコミュニケーションを図ったりする児童の姿が見られた。しかし、しっかりとインプットしてからコミュニケーション活動を行うようになったことで、日本語を使ってしまう児童の姿はほとんど見られなくなり、全体的に自信をもってコミュニケーションをとれる児童が多くなった。また、既習の表現も含めて繰り返し使うことで、単語や表現の定着も感じられるようになった。

成果②

見通しをもたせてコミュニケーション活動を行うようになって、児童が「英語を使って伝えたい」という思いをもって活動に取り組む姿勢が見られるようになった。また、児童一人ひとりの伝えたい内容も多様化してきており、英語を使ったコミュニケーションへの意欲の高まりが感じられるようになった。

今後の課題・方向性

- ・伝えたい内容が多様化したことで、中には学習していない単語を使いたいという児童もいる。できる限り自分が表現したいことを表現させてあげたいという思いはあるが、単語の数が多くなると音声面で慣れ親しませる時間を確保できなくなってしまう。児童が表現したいこととのバランスを取りながら進めていきたい。
- ・各単元ごとにコミュニケーション活動を設定しているものの、回数的には少ないのが現状である。スモールトークの回数を増やすなど、もう少しコミュニケーション活動を増やしていく必要があると感じている。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～尾花沢市立尾花沢中学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ▼即興でやりとりをする力をつけるために、グループでの学びが上手く機能していないと感じている。
- ▼正確さ(書く・話す)に課題があるが、互いに指摘し合えるところまでいっていない。
- ▼ペアでの「Mini Talk」は帯活動として継続しているものの、内容に発展性がない。
- ▼即興的に答える力に課題がある。予想外の質問をされたときにも、思考・判断して反応できる力を付けたい。

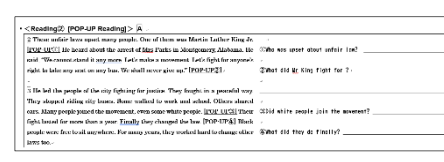


◇様々なパタンの質問を用意し、生徒が選択し、より知りたい情報についてインタラクションできるようにする。
◇聞いたり読んだりして得た情報についてやり取りをする体験を通して、自信をつけさせながら即興での会話ができるようにする。

具体の取組の内容

- 『協同的に学ぶ英語学習のデザイン ～ディスカッションにつながるような即興的なやりとりの力をつける授業～』をテーマに、国際教養大学のクリストファー・カール・ヘイル准教授を招聘し、3回の研修会および2回の授業公開を実施した。
- 『Teaching ESL/EFL Listening and Speaking (Nation & Newton)』を紹介していただき”meaning-focused input” “meaning-focused output” “language-focused learning” “fluency” の4つのポイントを意識して授業改善を試みた。
- 市の英検助成の制度がスタートしたことにより、英語検定の受験を促す環境が整った。外部試験を活用することによって、国で求めている英語力の基準と、授業で取り組んでいることが本当に一人ひとりの英語力向上につながっているかどうかを測定していく。

- ・「ひとくち英語」「文型ブック」で日本語→英語の問題を出し合うペア活動
- ・RetellingにつながるReading活動
- ・POP-UP Readingによる即興的な対話を通じた内容理解活動
- ・SummarizeからRetellingにつながる、内容理解を表現につなげる活動



成果①

- ペアでの活動に取り組むときに、即興で対応する力が向上している
- 3年生の「英語検定3級」の合格状況は全体の45%程度まで上昇した。市の英検助成の制度もあり、受験者も大幅に増えている。
- 「即興でやりとりする」ことを仕組む授業が増えた。生徒のふり返りからも「このような活動をするとう英語力がつきそう」というポジティブなコメントが返ってきている。
- 自分が読んだことについての質問に答える活動を行う中で、予想外の質問にも、思考のチャンスが与えられ、英語でやり取りすることへの自信につながっている。
- Mini Talkでも、一つ目の質問への答えに対してさらに質問をするなど、一問一答で終わらないように工夫をしていくことで、予想外の答えに反応するトレーニングになった。

成果②

- All Englishの授業に英語教師も生徒も慣れてきた。日本語の効果的な使用により、理解を促すことも可能であった。
- 読み取りの力がついてきている
- 生徒のReflectionを分析してみると、即興的なやりとりに難しさを感じながらも、意欲的にチャレンジしようとする姿勢を見て取ることができる。すぐに学力には現れなくとも、様々な言語活動に積極的に取り組むことができるようになってきている。
- 生徒がよりアクティブに英語の授業に向かうようになっている。「即興的なやりとり」をテーマにしたことにより、思考・判断・表現のチャンスが増えたと考えられる。要約を書くにしても、重要な英文を適切に抜き出して答えるレベルから、本文を自分なりにアレンジして意味が伝わるように工夫して要約するレベルまでできるようになった生徒も見られるようになった。
- 講師の先生から得た貴重な学びをすぐ実践につなげることができた。英語科独自の授業研究会を行えたことにより、英語科内での話し合いが活発になった。

今後の課題・方向性

- 「伝えること」「聞くこと」に特化した活動を仕組み、目的を明確にして取り組ませる必要がある。
- 発展的な課題に挑戦させることにとらわれて、共有の課題でしっかり押さえるべき内容がおろそかになっているときがある。共有課題がその先の発展的な課題につながるような授業を展開していく。
- 「読んでまとめる」とか「読んで自分の考えを書く・言う」など、統合的な活動ができるように活動を仕組む必要がある。
- 「即興的なやりとり」を評価することが難しいと感じる。授業内で、教師1人で生徒全員の評価を行うことは不可能に近い。「即興的なやりとり」を繰り返しながら、時期を決めて評価することを検討する。
- 生徒が課題を達成するために、単元内のどの場面でどんな言語活動が必要かを分析することで、段階を踏んだ単元計画する必要がある。生徒理解と教材分析の中で、より適切な言語活動を設定していく。
- 即興的に反応しようとする意欲はあるが、自分の伝えたいことをうまく伝えられず苦勞する場面が見られた。いかに語彙や使える文法を増やしていけるかが課題である。基本文を自分でしっかりアレンジして自分のものとして使えるようにするための個別の支援やそのためのツールが必要である。

現状の課題と課題解決のための手立て

パフォーマンステストの実施方法と評価の在り方及び授業との接続について

具体の取組の内容

- ・大学入試改革等に向けて、各授業においてスピーキング活動を取り入れた(音読活動・絵を使ったリテリング活動など)。
- ・授業公開・教科会・研修会を実施し、情報交換を行った。
- ・パフォーマンステストについては、学年の担当を越えて評価に参加した。

成果①

- ・様々なリテリングの方法を試みて、現時点で最善と思える方法で、継続して指導している。
- ・様々な方法を模索することにより、学年や教材の内容・レベルに合った方法で実施できるようになった。

成果②

- ・学年を越えて評価に参加することで、いまだ検討の余地はあるものの、ある程度基準を教員内で共有できた。
- ・教材研究において、パフォーマンステストとのつながりを意識するようになった。

今後の課題・方向性

- ・パフォーマンステストについて、学校としての3年間での達成目標、実施方法、評価の在り方を英語科教員全員で検討し、共通認識を持つ。
- ・即興でスピーキングを行う訓練や、そのテストの実施方法について検討していく。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～山形県立酒田西高等学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・(課題)4技能のうち、書く・話す弱い。バランスよく他領域と結び付けて伸ばすにはどうしたらよいか。
- ・(手立て)パフォーマンステストを工夫し、その評価の仕方を研究する。

具体の取組の内容

- ・定期試験の前後に、各年次でパフォーマンステストを実施した。
- ・目的、方法を変えながら、教科書の音読を多用し、既習の英語をreproductionすること、もしくはretellingすることにつなげた。
- ・授業のワークシートを年次担当者で共有し、お互いに授業を見合って改善に向けて話し合いをした。
- ・授業の導入部で、日常的な話題に関して生徒と教員、生徒同士でやり取りする時間を設け、英語で発話する機会を増やした。
- ・英語圏の新聞、ニュース、SNSの記事を素材として扱い、英語学習の動機づけをした。(2年次)
- ・地区の会場校として、1年次で公開授業を行い、前半は授業に関して協議した。後半は各校のパフォーマンステストやその評価に係る情報交換を小グループに分かれて行い、全体で共有した。多様なテストの方法と効果について理解を深めた。
- ・英検受験を奨励し、1次合格者には個別指導を丁寧に行った。

成果①

- ・パフォーマンステストの回数を重ねるごとに生徒の取り組み状況も確実に向上し、話すことへの抵抗感が薄らいできた。
- ・授業中、教員の英語による発話により、生徒同士で英語を使用する場面も増えた。

成果②

- ・外部学力テストの偏差値が7月から11月の間で2.5上昇した。特にリスニングのスコアが上昇した。(1年次)
- ・英検の上級を目指して受験する生徒が増え、合格率も向上した。
- ・定期考査のライティング分野の得点率も向上した。

今後の課題・方向性

- ・模試の結果から、読解力の弱さも課題であるので、さらに4技能のバランスの取れた授業づくりが必要である。(1年次)
- ・各年次で基本重視の教科書を使用しており、次年度もその予定であるが、使用語彙数が多く、難易度の高い英文に向かう力をどう養うか。
- ・生徒の英語運用能力を向上させるための質の高い自学を、どのように促したらよいか。
- ・パフォーマンステストの波及効果を狙いつつ、評価のポイントを縛って継続的に実施する。教科内で方法と評価についての情報交換を適宜行う。